

---

# HUNTER × HUNTER ~ 漆黒の転生者転生 ~

神威

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HUNTER×HUNTER 漆黒の転生者転生

### 【Nコード】

N80720

### 【作者名】

神威

### 【あらすじ】

オリキャラの転生者がHUNTER×HUNTERの世界で原作ブレイクしていきます。オリジナル要素満載です。

## 第一話（前書き）

初めてですががんばっていこうと思います。

## 第一話

??? (ここどこ何だ?)

少年が目を醒ますと見たことない真っ白な空間にいた。

少年は立ち上がり周りを散策していると、どこからか声が聞こえてきた。

??? 「目を醒ましたか」

少年 (ビクッ!)

少年は真後ろからの声に驚き素早く振り返った。

そこには長く白い髭をはやした仙人みたいな老人が立っていた。

少年 「(いつの間に...) あんた誰だ...そしてここはどこだ」

??? 「ワシか? ワシはそっちの世界でいうと【神】みたいな存在じゃ...そしてここがワシが神の力で創った空間じゃ」

神と名乗る老人が楽しそうに説明した。

少年「じゃなんで俺はこんなところにいる」

神「死んだからじゃ…」

………

………

………

………

…

少年「ハア？…（なに言っただこのジジイ）」

神「正確に言えば死んで死んでしまったかの」

少年は顔を真っ赤にしてキレた…

少年「なんで死ななきゃいけないんだよ！……まだ色々やりたいこととかあったのに………

神「まあー落ち着け」

少年「これが落ち着いてられるかよ！」

神「勝手に殺したのは謝るがこっちにも事情があるんじゃ」

少年「じゃどんな理由だよ…つまりん理由だと殴り飛ばすからな……」

神は少年の発している殺気と言葉に冷汗をかきながら理由を説明しようとしついた…

神「実はのワシの孫がお前に助けられたことがあつての、それで御礼をしようとしたら間違つて殺してしまったのじゃ…テヘ」

少年「……り、理不尽だ…てかつ、神なんだつたら生き変えせるんじゃないのか！」

神「それがのゝ規則で出来んのじゃよ」

少年は神の言葉に絶望していると、神がしゃべりはじめた。

神「転生という形でなら出来ないこともないんじゃないが…どうする？」

少年「あるんなら早く言えよ」

少年に元気がかえってきた。神はその様子を「やれやれ」っといった感じで見ていた。

神「特別にお前だけの世界を創つてやる感謝しろよ……してどんなせかいがよい？なんでもよいぞ」

少年「アニメとかでもいいのか？」

神「ああよいぞ」

少年「じゃ…… HUNTER×HUNTERの世界にしてくれ」

神「あんな命の危険があるのでいいのか？」

少年「ああかまわない」

神「簡単に死んでもらったらいやなので……三つ願いを叶えてやるっ」

少年「うっそマジで！じゃ〜じゃ〜……………」  
…よし！」

神「決まったようじゃの〜」

少年「えっと…一つ目は身体能力を最強に…二つ目は念能力を三歳くらいから使えはじめられるように…三つ目は大業物の刀をくれ…  
…こんなもんか」

神「そんなんでいいのか？もっとチートっぽくしないのかの〜？」

少年「いいのいいのチートにしたら楽しくならないからでも最強にはなるつもりだけどね」

神「まあーおぬしがよいのじゃったら………どういう形で転生する？」

少年「う〜ん………転生する人はだれでもいいけど（原作キャラ以外）原作のはじまるとしが18歳がいい」

神「わかった………もう転生してもよいかな？刀は頃合いをみて贈るからの」

少年「どーも」

神「ではいくぞ！」

少年はだんだん光りに包まれていった。

少年「あっ忘れてた…ジジイ俺の名前は【レン・アブソリュート】だ」

レンが言い終えると全身が光りに包まれて消えた

神「がんばれよ」



## 第一話（後書き）

次回も楽しみに。

## 主人公紹介（前書き）

次は主人公紹介です。

## 主人公紹介

### 【レン・アブソリュート】

幼いときから武術、剣術を学んでおり、大会などで連続優勝記録を更新している。頭脳も良く、軍から依頼や勧誘が絶えず来る。そのためか暗殺や誘拐など、されるが、自らの力で撃退している。

家族は幼いとき、交通事故でなくなっているため一人暮らし。親戚が引き取ると言っていたが金とレンの頭脳が目的なので断っている。

ある日道を歩いていると子供がトラックに引かれそうなところを助けた。この出来事がきっかけで神と名乗る老人と出会う。

## 主人公紹介（後書き）

引き続きがんばっていきます。

## 第二話（前書き）

引き続きがんばっていきます。

## 第二話

レン（知らない天井だ）

????「あつ目覚ましたのね」

知らない女性が俺の顔を覗き込んでいる。

女性「うゝん……名前どうしようかな………決めた【レン】ね」

女性は笑顔でしゃべりかけて来る。そしていつのまにか眠ってしまった。

~~~~~三年後~~~~~

レン「お母さん森に遊びに行つて来るね」

母親「あぶないことしたらだめよ」

レン「わかってるよ」

レンはそういつと家を飛び出し森に向かった。

レン「今日は何しようかな……念でもするか」

そういつと大きな石の上に座禅を組んで集中したした。……すると湯気みたいなのが体が覆った。

レン「よし」

そういつと立ち上がり【虎徹】を出し素振りをした。それから3時間ぐらいたった

レン「（こんなもんでもいいだろ）ふう〜……………帰るか」

そういつと村に向かって歩き出した。

レン（そういえば俺クルタ族だったけ…ジジイの野郎いきなり死亡フラグじゃねーか……）

そんなことを考えていると向こうから男の子が「おい」って駆け寄ってきた。

男の子「どこ行ってたの？」

レン「森に行ってた…そういうルカはどうしたんだ？」

男の子はルカというらしい

ルカ「帰りが遅いからレンのお母さんに見てきてって言われたから」

レン「なるほど…じゃいそいでかえるか」

レンはルカと一緒に村に向かって歩きはじめた。

ルカ「いっつも森に行ってるけどなにしてんの？」

レン「教えない（修行してるなんていえないよな）」

ルカ「ケチだね」

そんなことを言い合っていると村に着いた。

ルカ「じゃまた、バイバイ」

「おう」返すと家にかえっていった。

レン「ただいま」

母親「お帰りなさい……ご飯出来てるから手洗ってきなさい」

レン「ほーい」

そういうとササツと手を洗ってリビングに行きご飯を食べた。そのあと風呂に入って部屋にいった。

レン（あしたなにしようかな？……あっそーだ何系か調べてないやあしたしらべよーとおやすみ）



次の日

レン（よし、系統しらべるか………なんだったつけ水見式オーラ選別方だったような気がする………グラスにたっぷりと水を入れてその上に葉っぱを浮かべて練をする）

レンが練を発動すると水の色が変わっていった

レン「放出系だったか………これから特訓だな」

## 第二話（後書き）

引き続きがんばっていきます。

## 第三話（前書き）

とても短いです。

## 第三話

~~~~~五年後~~~~~

レン「だいぶさまになってきたな」

あたり一面木が薙ぎ倒されたりしていた。

レン「そろそろ旅に出るかな…蜘蛛くるかもしんねーし」

そういつてレンはその場からたちさつていった

レン（これからどーすっかなジン・フリークス探しにいくとか…いやまてよ殺し屋するのもありだな…よし殺し屋にしよう全は急げだ）

男「うああああ」

街に悲鳴が響いた。漆黒のロングコートを着てフードを深くかぶっている少年が追い詰めた男に向かって喋りはじめた。

レン「お前がマフィアのボスか?…」

ボス?「お、お前は誰なんだ!」

マフィアのボスは震えながら叫んだ

レン「俺か?…そうだな【漆黒の転生者】といえばわかるかな」

ボス「お、お前が最近噂になっている殺し屋か!……………た、頼む助けてくれ!金ならいくらでもやる!女もやるから見逃してくれ!」

レン「ムリ」

レンは簡単に返すと刀【虎徹】を振りかぶってそのまま振り下ろした。

レン「任務完了つと…………そろそろ出て来たらどうだ?」

???「ばれてたか」

すると屋根の上から老人が降りてきた。降りてきて向き直るとレンがしゃべりだした。

レン「あんたは…………ゾルディック家か?」

ゾ家「っ！…なぜ知っている」

レン「前に一回調べたことがあってな（殺気バンバン出してるよ…これぐらいだまったら大丈夫だけど）」

ゾ家「そーかまあ良いわ…お前が【漆黒の転生者】かの」

レン「ああ」

ゾ家「こんな子供じゃったとわの……本題に入るがおぬしのせいで仕事が減っておるんじゃよ」

レン「大丈夫…もう辞めるから金貯まつたし」

ゾ家「そーかそーかそれはよかった。わしの名はゼノじゃ。そしてこれが電話番号じゃ殺してほしい奴がいれば電話してくれ」

レン「どーも。俺の名前はレンだよろしく…で、手合わせしてみない」

レンはそういうと殺気をだしてするどい目つきで睨んだ

ゼノ「やめとくわ」

レン「なーんだつまんねいつかはしてもらうからな」

そついうとレンは闇に消えていった

ゼノ「いつか…か……勝てつかの？」

ゼノが発した言葉は誰の耳にも届くことがなかった。

## 第三話（後書き）

引き続きがんばっていきます。



## 第四話（前書き）

ハンター試験始まります

## 第四話

レン「996…997…998…999…1000ふう、疲れた」

そういうと仰向けに寝転がった

レン「あれから十年か…ハンター試験受けに行かなきゃなたしかゴンたちもこの試験受けるはずだな楽しみだ。…そうと決まればさっさといくか」

………

………

………

………

………

…

レン「ナビゲーターはここかゴンたちは凶<sup>キリコ</sup>狸狐っていう魔獣だったっけ」

ナビゲーターはハンター資格試験会場の場所に案内をしてくれるのが役目（毎年試験会場が変わる）ちなみに、受験者の数を減らすためでもある。

レン「失礼しまーす」

???「よくきたなハンター 試験希望者だろ？俺の名前はクルル  
ってんだよろしくな」

レン「おう俺はレンだよろしくな（あんがい普通だった）」

お互いに握手をしてしばらくの間談笑していた

クルル「そろそろいくか今行ったら一番乗りだぜ」

レン「どーでもいいけどいこうぜ」

そういつとクルルの背中から翼が生えた。レンは「うわ」と驚いた。

レン「いいなこれ」

クルル「我々一族だからな……さあ行こう手を掴んでおくれ」

レン「レッツゴー」

……

……

……

……

……

…

クルル「ザバン市…ツバシ町の2・5・10は…っと……ここだ」

レン「定食屋かよ……まあいいや入ろ」ガラガラ

店員1「いらっしえーい！……御注文は……？」

クルル「ステーキ定食」

店員1「（ピク）焼き方は？」

クルル「弱火でじっくりと」

店員1「あいよ……」

店員2「お客さん奥の部屋にどうぞ」ガチャ

ジュ〜ジュ〜

レン「あの定員2可愛かったな」

クルル「た、たしかに……ってちがう！まあがんばれよ大丈夫だと思っけど……」

レン「まあがんばるわ……ここまでありがとな」

クルル「お安いご用だ……じゃーな」

レン「定員2にもよろしく」

クルル「あほ」 カチ

ウィーーン

レン「ステーキ定食うまつ！」 チン！

レン「B100階か…誰かいるかな」

しーーん

レン「だ、だれもいねえー……ハア……寝よ」

………

………

………

………

…

ガヤガヤ ワイワイ

レン「うつせえー！」

しーーん

レン「全く静かに出来ねーのかよ（はやくはじまんねえーかな）」

???「ちよつと君」

レン「なにつてか誰? (機嫌わりーにはなしかけんなよ)」

???「オレはトンパよろしく……ところで新人なのに一番んだっ  
たんだね」

レン「ああ…それで?」

トンパ「すごいよ!おつとそうだ…お近づきの印しに飲みなよ」

っといってコーヒーを差し出してくる

レン「いらね (たしか新人漬しのトンパだったような)」

トンパ「そーいわずに (早く飲みやがれ)」

レンはちよつと殺気をだして「いらね」といった

トンパ「(ヒッ!)わ、悪かったなじゃました」っと言い残し去っ  
ていった

ジリリリリリリリリ

???「ただ今をもって受付け時間を終了いたします……では、こ  
れよりハンター試験を開始いたします」  
レン (やつとか待ちくたびれたぜ)

試験官？「さて、一応確認いたしましたが、ハンター試験は大変厳しいものもあり運が悪かったり、実力が乏しかったりすると、ケガしたり、死んだりします。」

試験官？「先程のように受験生同士の争いで再起不能になる場合もございます……それでも構わない……という方のみ、ついて来てください。」ザッザッぞろぞろ

試験官？「承知しました…第一次試験405名、全員参加ですね」

レン（当たり前だろここまで着た時点で決まってるにだろうに第一次試験はどんなだろうな………）　　なんか進むペース早くなってきたんな…マラソンってとこかな）

試験官？「申し遅れましたが、私、一次試験官担当官のサトツと申すものです。これより、皆様を二次試験会場へ案内いたします」

ボウズ頭「二次……？ってことは一次は？」

サトツ「もう、はじまっているのでございます。二次会場まで、私について来ること、これが一次試験でございます」

サトツ「場所や到着時刻はお答えできません。ただ私について来ていただきます」

レン（やっぱりな……変態が近づいてくる……）

変態「ねえきみどのくらい強いんだい」

レン「お前より強いよ……で名前は？」

変態「クックックぼくの名前はヒソカだよ」

レン「俺の名前レンだよらしく」

ヒソカ「よろしく」

レン「なんやかんやで出口だな」

レンたちは湿原に出た。そして出口のシャッターがおりる。ガ  
チャン

サトツ「この湿原の生き物はありとあらゆる方法で獲物をあざむき、  
捕食しようとします」

サトツ「標的をだまして食い物にする生物達の生態系……詐欺師の  
罠とよばれるゆえんです」

サトツ「だまされることのないよう注意深く、しっかりと私のあと  
をついて来て下さい」

オッサン「おかしいこと言うぜ、だまされるのがわかっててだまさ  
れるわけねーだろ」

????「ウソだ！そいつはウソをついている！」

一人の傷だらけな男が出て来た

????「そいつはニセ者だ！試験官じゃないオレが本当の試験官だ  
！」



そついうと男はサトツを指差した

オッサン「ニセ者？どういうことだ！」

ボウズ頭「じゃこいつは一体…？」

レン（馬鹿だねーハンターがこんなやつらに負けるわけないのに）

試験官？「これを見る！」

そついうと試験官？は猿みたいなのを出した

試験官？「ヌメーレ湿原に生息する人面猿！」

試験官？は続ける

試験官？「人面猿は、新鮮な人肉を好む、しかし、手足が細長く非常に力が弱い…そこで自ら、人に扮し、言葉巧に人間を湿原に連れ込み他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ！」

また、サトツに指差した

試験官？「そいつはハンター試験に集まった受験生を一網打尽にする気だぞ！」

その瞬間試験官？はバラバラになり肉変とかした。そしてヒソカとサトツと針がいっぱい刺さっている奴がレンの方をみたほかの受験生たち啞然としていた。

ヒソカ「あれ…君がやったのかい」

レン「さあー（見えたのは三人だけか）」

そついうとヒソカが笑い出した

ヒソカ「君と手合わせ願いたいね」

レン「いつかな」

またヒソカが笑い出し「楽しみにしているよ」といった。すると今度はサトツがしゃべりだした

サトツ「少々トラブルがありました。が私を信じる者だけついて来てください」って言って走りだした。

オッサン「もうどうなってるんだ」

金髪「ついていくしかあるまい」

レン（あの金髪たしかクルタ族だったような名前は……忘れたあとで聞こ……ところでヒソカ殺しそうだな霧も出て来たしまあ……いいか）

すると銀髪の少年が話しかけてきた

銀髪「ねえねえ歳いくつ？あつ俺キルアね」

レン「俺が18だちなみに名前はレンだ」

キルア「レンってさめっちゃ強いでしょ空きがないし脚のはこび方とか全然違うもん」

レン「さあーどうだろう」

キルア「ヒソカとどっちが強い？」

レン「俺かな？」

キルア「うげっ！マジで！」

レン「アハハ、もうついたみたいだぞ」

キルア「次どんなのだろ退屈しないのがいいなあ」

レン「どーだろ……ん」

遅れてきたヒソカの肩にオッサンが担がれていた、レンはヒソカに近づいてなにがあったか聞いた……話が終わりと同時にドアが開いた……そこには大男と女性がいた。大男からぐるぐるなどの腹の音が聴こえてきた。

女性「どお？おなか大分すいてきた？」

大男「聞いているとおり、もーペコペコだよ」

女性「そんなわけで二次試験は……料理よ！」

#### 第四話（後書き）

引き続きがんばっていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8072o/>

---

HUNTER×HUNTER～漆黒の転生者転生～

2010年11月12日18時03分発行